

Welfare

[ウェルフェア]

2016

59

「空飛ぶ車いす」特集号

2016年度社会福祉助成事業助成先決定!

CONTENTS

- P2 くっきり! 福祉の未来形 ~日社済助成事業成果報告
音楽療法事業「低出生体重児に対する音楽療法セミナー」
NPO法人 生涯発達ケアセンター さんれんぶ
- P4 誰も自殺に追い込まれることのない社会へ
~地域のつながりが命を守る~
函館家庭生活カウンセラークラブ
- P6 「空飛ぶ車いす」青少年の活動レポート
アジアに届け! 空飛ぶ車いすプロジェクト in Thailand
- P15 「空飛ぶ車いす」活動レポート
輸送ボランティアに参加して
- P16 チェンマイからの手紙
- P17 「書き損じはがき」収集ご協力をお願い
- P18 「空飛ぶ車いす」青少年の活動レポート
神戸市立科学技術高校の空飛ぶ車いす活動
- P22 2016年度社会福祉助成金交付団体
- P23 福祉の共済コーナー

● 助成事業成果報告

音楽療法事業

「低出生体重児に対する音楽療法セミナー」

NPO 法人生涯発達ケアセンターさんれんぷ

代表 中林 亜衣

一、はじめに

代表者が音楽大学在学中に、「さんれんぷ」の前身となる任意団体を立ち上げ、障害を持つお子さんに対する音楽療法・特別養護老人ホームでの音楽療法を開始し、8年間継続してきました。療育者として経験や、自身が母になり、様々なことを学んでいく中で、お子さんやお母さんへのケアがもつと身近になり、敷居の低いものになったらしいなど感じ、平成26年9月、NPO法人化。代表者の専門分野である、音楽療法と心理学を基盤に、



地域に根付いた・身近な場所を作るため、活動しています。主な事業は、音楽療法事業・発達カウンセリング事業・また、伊勢崎市の指定を取り、相談支援事業所「びあ」を運営しています。

二、助成事業概要

実施目的 日本ではまだ認知度の低い、低出生体重児に対する音楽療法の周知を図り、概要を学ぶと共に、知識を習得します。また、低出生体重児及びその保護者のストレスの緩和、児の成長促進のため、音楽療法を取り入れる手順を具体的に学び、検討していきます。

内容 「低出生体重児に対する音楽療法セミナー」の開催

期日 平成27年11月14日(土)

10時受付開始 10時30分開演 15時終了

場所 ビエント高崎

本館301号室(高崎市問屋町2-17)

講師 呉東進先生

(京都大学大学院医学研究科教授 エコチル京都ユ

三、事業の成果

ニットセンター)
対象 医療関係者(医師、看護師等)、日本音楽療法学会認定音楽療法士、関連分野の学校に在学の学生

当日は、県内外から40名程の受講者(医師・看護師・認定音楽療法士等)、10名の実行委員が参加し、本セミナーを開催することができました。呉先生により「聞こえの仕組み」、「胎児期からの発達と音への反応」、「低出生体重児(新生児・乳児)



の音楽療法、「評価方法」について具体的に、また、画像や動画を通して、分かりやすく学ぶことができました。

・講演要旨

アメリカでは30年ほどの歴史があるとのことだが、日本においては、まだ認知の低い分野である。概要や理論、また、音楽のエビデンスを数字で見ることができたため、医療関係者にとっても、音楽の効果を知る機会になったことであろう。実際にNICUやGCUでCDをかけているという病院に勤務する看護師もいた。呉先生によれば、CDからの音楽には、ノイズを消す役目はあるが、それ以上の役目はないとのことだった。音楽を使用するうえで最も大切なのは、児の様子や反応にあわせて、音楽が変化していくことだ。また、児に適した音の大きさ（デシベル）や、高さ（ヘルツ）も受講者に実際に体験していただくことができた。臨床では欠かせない評価方法についても、児に対する評価と、保護者に対する評価について、学ぶことができた。アンケートにもあったが、新しい



分野であるため、実践することが難しいこと・医療関係者ではない音楽療法士がNICUに入るというハードルの高さ・低出生体重児に対する音楽療法を実践している病院が日本に2カ所ほどしかないことなど、実現にむけては、数々のハードルがあることを誰もが感じた。現在、音楽療法士は国家資格でもなければ、音楽療法には医療点数もつかない。しかし、音楽が及ぼすことのできる影響は、児にとっても、その保護者にとっても多大である。すぐにNICU・GCUで音楽療法を実践することは難しいが、まず、このセミナーを通して、低出生体重児への音楽療法を学ぶことができたため、今後、日本でも実践する病院が増えていくことを期待したい。

四、成果の広報・公表

セミナーを終え、弊法人の広報紙「さんれんぶ通信」に報告記事を載せ、法人会員・各機関へ送付しました。弊法人のFacebookページへの投稿も行いました。当日参加していただいた医師3名・および実行委員には、受講者のアンケート集計結果もあわせて送付し、報告をしました。また、本セミナーを受け、群馬県立小児医療センターへ、低出生体重児に対する音楽療法のさらなる周知を図り、実践へむけ具体



的に検討していきます。
名義後援をいただいた、群馬県・NHK前橋放送局・上毛新聞社・FM GUNMAにも報告書を提出しました。

五、今後の課題

まだまだ認知の低い分野であるため、本セミナーを終えた今がスタートラインであると思います。本セミナーをきっかけに、少しずつでも、低出生体重児への音楽療法が周知されれば大変うれしく思います。身近なところでは、群馬県でも県立小児医療センターのNICU・GCUでの低出生体重児の音楽療法実践を目指しています。また、児へはもちろん、自分の子を「小さく産んでしまった」と罪悪感や不安をたくさん抱えているお母さんに音楽が届き、「赤ちゃんと一緒に○○ができる」、「赤ちゃんに○○ができる」という出産後の母親が当たり前を感じることもできる感情を、NICU・GCUでも感じることのできる環境づくりがおこなえると良いと思います。そして、音楽療法の認知・普及が広がることを目指し、今後も活動していきたいと考えております。



● 助成事業成果報告

誰も自殺に追い込まれることのない社会へ

地域のつながりが命を守る

函館家庭生活力カウンセラークラブ

代表 伊藤 繁子

一、はじめに

当クラブは、「函館家庭生活力カウンセリング講座」を修了し、公益社団法人北海道家庭生活総合カウンセリングセンターの認定を受けたもので構成され、昭和58年設立以来、市・近隣市町村の住民に對しての電話・来所相談を主に活動しているボランティア団体です。現在活動場所を函館市女性センター内、市役所支所内（湯川・亀田）に置き、毎日もしくは週1回の電話・来所相談を開催しています。また28年前より子育て中の母親への支援



を目的としたサロンのような場の提供も行っていきます。

二、助成事業概要

自殺予防対策をより効果的に推進するためには、「自殺は社会や地域の課題である」という認識を共有し、様々な枠を超えて協力し、自主的に取り組むという地域づくりが重要です。そのためには、人と人とのつながりを大切に温かい心を育てて行かなければなりません。その基礎をつくるきつかけとなるよう、今回の講演会を企画しました。

11月15日(日)13時より市内ホテルにて、講師は自殺予防の第一人者、「NPO法人ライフリンク代表 清水康之氏」を招聘し、開催しました。当日は、雨の中老若男女問わず、約150名ほどが来場し、熱心に耳を傾ける中、講師が感極まり声を詰まらせると、聞く人の中には目頭をおさえる場面もありました。

さらに後半、自殺予防についての考察を深める為、グループに分かれブレインストーミングを行いました。一人ひとりが様々な意見を付箋に書き入れていったものを模造紙に集約していく作業を行い、講師と

三、事業の成果

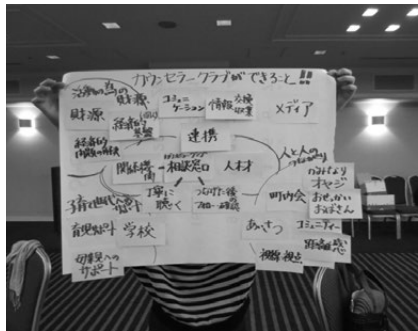
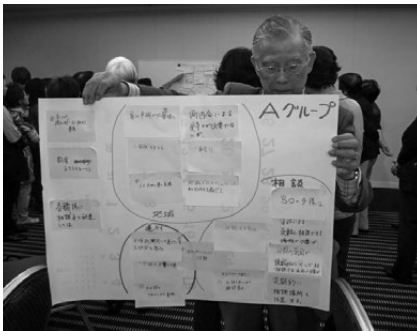
のディスカッション、ご指導、質疑などインフォーマルな研修も取り入れることができました。

地域における自殺予防対策で重要なことは、一言でいえば、「生きたい」と思うような地域づくりです。単一の自殺対策をそれぞれがばらばらに行えばよいというものではなく、さまざまな要因に対する様々な対策を、総合的・包括的、かつ効果的に講じることが出来る社会を作っていく、そのためのインフォー



マルな社会資源、家族、親戚、近隣、友人・同僚、ボランティアといった、いわゆる個人と個人のつながりを主としたキーパーソンになる人材の育成、またはそれを活かせる場が必要であります。そしてそれらが繋がり、より大きな支援の輪が広がって行けるような意識作りのきっかけが出来たと思います。

当クラブは、電話・来所など、広く一般市民に対しての相談活動を行っています。話を聴くということとは、ただ聴けばいいということではなく、当事者の心に寄り添い、受容すること、相談員全員が十分認識し、そのモチベーションを維持すること



が求められます。多様化する生活様式や相談に、福祉性、平等性をもって十分に対応するためには、相談員は常に自己研鑽を含む鍛錬を積んでいます。今回の講演会は、一般市民にそれを知ってもらうことにより、相談活動を通して福祉的還元を促していることを確信できました。また、自殺対策関連団体や地域でキーパーソンとなる町内会や、福祉、教育関連団体、NPO法人などとの関係も構築でき、当クラブとの連携も回り、より多くの社会的貢献ができることが予想されます。

自殺で亡くなる人は、2014年度で25427人。そのうちの多くの方が、最低4つ以上の問題を抱えていて、死を選ぶ前1カ月の間に、何らかの専門機関を訪ねているのだと、講演の中でお話がありました。ということは、すなわち地域が連携することが重要だということを物語っています。今回の講演会を機に、自殺予防は地域の問題であり、一人ひとりが共に助け合う共助という社会を構築して行かなければならないこと、さらに、誰もがゲートキーパーとなりうるということを、来場の方々が身にしみて感じられ、共有できたと思います。

四、成果の広報・公表

講演会内容を冊子にまとめ、後援、広報していただいた関係各所に配布しました。ご案内したものの出席出来なかった方から、講演会の内容が知りたいというお問い合わせがありました。函館新聞社の取材があり、18日に大きく掲載されました。

北海道新聞社の取材もあり、記者の方がとても感銘され、今回の公開講演会にからめた、道南全体の

自殺関連啓発の記事を考察中ということで、期待しています。

五、今後の展開

公開講演会の周知活動中、市内の包括支援センターより問い合わせがあり説明に伺った所、今後当クラブと連携し、地域貢献のお手伝いを一緒にというお話がありました。当クラブとしては、まず自主の活動を知ってもらうこと、そしてそこから連携の第一歩がはじまるということを目的の1つにこの公開講演会を企画しましたので、それが実りつつあるということは、大きな一歩です。地域の一人ひとりが手をつなぎ、生きやすい環境を作っていくことは、今後ますます、高齢化率があがることを考えると、地域として目の前に突き付けられた課題であり、その対応は急務です。今回はそのきっかけ作りとして公開講演会を開催しましたが、今後はそれを足掛かりに、さらに地域と連携し、近隣住民のニーズに沿った、地域から必要とされる活動づくりをしていきたいと思えます。



■アジアに届け！

空飛ぶ車いすプロジェクト in Thailand

2015年8月25日～8月31日

空飛ぶ車いすでは、これまでに27カ国、7500人以上の人々に車いすを寄贈してきました。今回は昨夏にタイ王国を訪問した、FWS（新潟医療福祉大学）、KWR（神奈川工科大学）の学生たちの素晴らしい活動内容を紹介させていただきます。日社済はこれからも空飛ぶ車いす活動を支援していきます。

日本国内で予めタイに寄贈する車いすを修理し、現地へ送ります。1台でも多くの車いすを、出来る限り長く使ってもらうため、現地にて再度、入念に点検・修理を行います。単に多くの台数を寄贈するだけでなく、タイでは車いすを使った経験のない人が大勢いるので、使い方や姿勢など車いすを利用するのに必要な知識（正しいフィッティング知識）を身につけてもらい、間違った車いすの使い方による骨の変形など、生活に支障をきたすような副作用を防止する為に正しいフィッティング知識の伝達を行い、体験してもらいながら覚えてもらう事も主要目的とし、FWSが中心となり、「車いす適合」を行いました。

参加者（敬称略・順不同）

神奈川工科大学 KWR	梅原 直人	相川 千晶	羽賀 大樹
新潟医療福祉大学 FWS	平井 瑠奈	篠原 梨乃	伊与部 那月
	夏井 貴人	宮沢 翔	山川 亮輔
韓国	KIM YOU JIN	PARK HYE RI	KIM JIN SEOP
	KIM YOUNG SUL		
タイ	MON	DOME	PINE
	BEN	MEAN	TYOCOON
	SAIWARUN	SUPAWADEE	PANY
ボランティア	6名		

日程

8月25日(火)

- ・羽田空港にて出発前ミーティング

8月26日(水)

- ・日本出国
- ・タイ国スワンナブーム国際空港にて、韓国チームと合流
- ・タイ国内線にて、ドンムアン空港からサコンナコン空港へ移動
- ・サコンナコン病院にて車いす贈呈式および会見。車いすをチェック
- ・市内観察（寺院2カ所）



「空飛ぶ車いす」青少年の活動レポート

8月27日(木)

- ・車いす修理活動(終日)



8月28日(金)

- ・車いす利用者宅訪問、車いす贈呈(4カ所)
- ・病院にて車いす贈呈
- ・小学生によるタイ式ボクシング鑑賞
- ・サコンナコン Thank you Party



8月29日(土)~30日(日)

- ・サコンナコン出発 ~ 観光 ~ バンコクへ移動 バイヨークスカイレストラン



8月31日(月) 朝、スワンナブーム国際空港より成田空港へ帰国

新潟医療福祉大学（FWS）・神奈川工科大学（KWR）の皆様レポートをお届けします。

一、出発前の準備

今回の活動に向けて以下のことを出発前に準備しました。

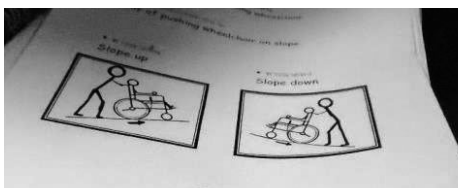
- ・タイ語の車いす取り扱い説明書作成
- ・シーティング勉強会
- ・クッション製作

タイ語の車いす取り扱い説明書作成

私たちはまず、車いすの広げ方・折りたたみ方・前輪の浮かせ方・上り坂と下り坂の介護法・でこぼこ道や段差の超え方等、身近にいたタイ人の方に協力してもらいながらタイ語に翻訳しました。タイには、訳した説明書を印刷して持って行きましたが、部数が足りず、現地で更に印刷をして病



取り扱い説明書とそれを配布するFWSメンバー



タイ語に翻訳された車いす取り扱い説明書

院や車いすを寄贈した方々に配布しました。

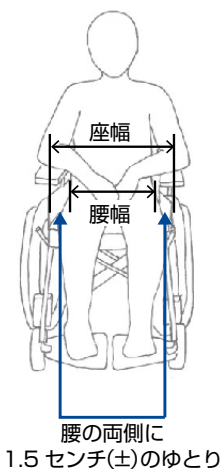
シーティング

シーティングとは、身体筋力の低下や障害などにより適切な姿勢で座ることが困難な方に対して「状況に応じた」適切な姿勢を保持させる技術のことです。適切な姿勢と一口に言っても、食事に適した姿勢、作業に適した姿勢、休息に適した姿勢はそれぞれ異なります。つまり、偏った姿勢が固定化しないようにする事、さまざまな姿勢がとれる事が肝要です。私たちは出発前に以下の事を学びました。

●シーティングの基準

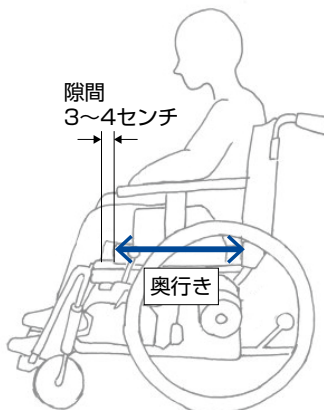
- ①座幅（シート幅）
自走用車いす…腰幅+3〜4センチ
介助用車いす…腰幅+4〜5センチ
目安として腰の両側に手のひらを差し込み、少し余裕がある程度。

座幅のシーティング基準



- ②シート奥行き
通常…シート奥行⇨大腿長+2〜3センチ
足こぎ…シート奥行⇨大腿長+3〜5センチ

シート奥行きのシーティング基準



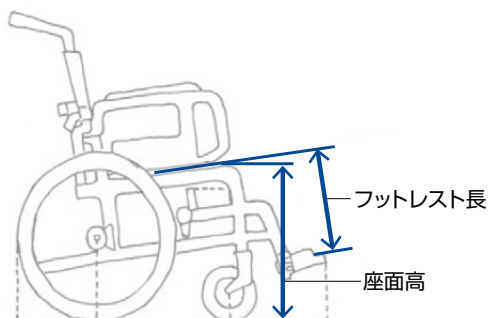
- ③座面（前座高）の高さ

前座高⇨座位下腿長+5〜7センチ
※屋外で使用する場合、障害物を考慮して高めに設定する。

フットレスト長⇨下腿長

シートと大腿部に軽く隙間が空く程度

座面の高さシーティング



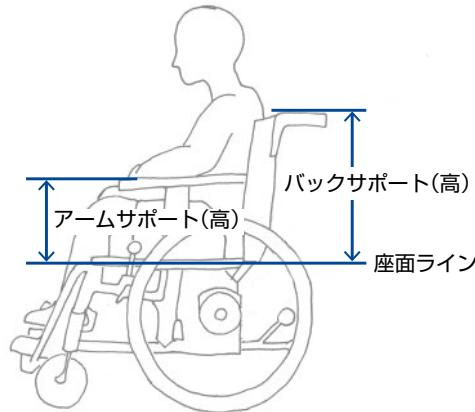
④ バックサポートの高さ

通常自走用バックサポートは、肩甲骨下角以下座位機能を重視する場合は、肩甲骨下角にかかる程度

⑤ アームサポートの高さ

肘を直角にした時の位置より1〜3センチ高く低い・肩が下がり前傾姿勢になる。高い・肩が挙上、アームレストを使用しなくなり良い姿勢を保てない。

バックサポート(高)とアームサポート(高)のシーティング基準



⑥ 背張り調整
脊柱の形などを考慮し無理のない調整を行う。



家庭訪問し、車いすの適合、寄贈した男性

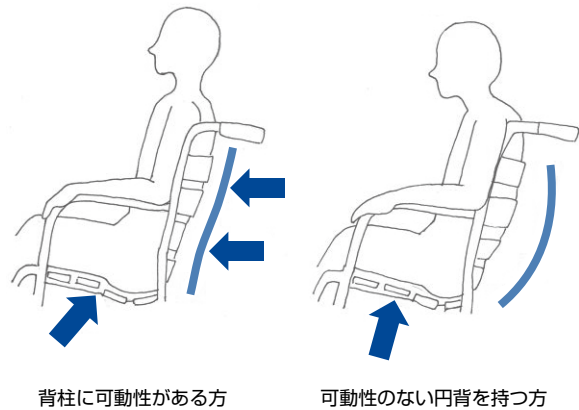
・シーティングのまとめ

車いすのシーティングを考える際には利用者の身体状況のみならず、車いすが使用される環境を考慮したシーティングを行わなければならない。利用者にマッチしたシーティングを行ったとしても使用される環境で操作しづらいものであったら、その車いすは移動機器としての役割を果たすことができないからです。シーティングをする際には、利用者の生活環境を踏まえた調整を行う必要があると言えます。

クッション製作

前回の海外活動では、利用者が車いすの座シートとの接触部位に褥瘡(床ずれ)を起こさないことを目的としクッションを製作しました。今回は

背張り調整例



車いすを使用したことで二次障害が起こらないよう現地でも調達可能な材料で以下のクッション等の製作を行いました。

- ・座幅クッション
- ・アームサポート用のクッション(以下、高さ上げるくん)
- ・レッグサポート

ここでは今回のクッションの目的・製作方法を記載します。

●座幅クッション

痩せている方などで、車いすの座幅の方が大きい人が正しい姿勢で車いすに座れるように使われます。座面の端に座幅クッションを入れます。(写真左・モデルと車いすが丁度よいため、座幅クッションの必要性は低い)



座幅クッションによる調整

● 高さ上げるくん

アームサポートの高さを調節し、正しい姿勢にします(写真左)。

丸めた新聞紙で高さを調節しアームサポートの上から高さ上げるくんを巻きます。新聞紙がずれないようにひもで固定し、タオル部分も分離しずれないようにしっかりと固定できるようにします。



高さ上げるくんによる調整

● レッグサポート

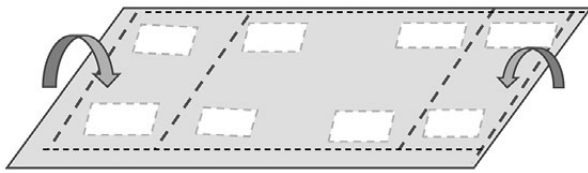
足がフットサポートから落ちないようにレッグサポートを装着します。長めのタオルの両端を折りたたみ、全体を一度縫い合わせ、マジックテープを取り付けて作成します。

右下は実際の利用者の方の車いすにレッグサポートを取り付けた写真です。この利用者は足をほとんど動かすことができませんでした。そのため、車いすで移動する際にフットサポートから足

が落ち、怪我をしてしまう危険性があったので、レッグサポートを使用しました。



レッグサポートの装着



レッグサポート

長めのタオルの両端を折りたたみ、全体を一度縫い合わせる。マジックテープのオスは折りたたんだ範囲に取り付け、メスはオスと合わさるように1枚になっている部分へ取り付ける



車いすを寄贈した女性

二、タイ国内での活動 車いすを届けた人たち

修理活動の基点となったサコンナコン病院より20キロほど離れた2人と病院近くに住む2人の合計4人の家庭を訪問し、車いすを寄贈しました。車いすを寄贈したAさんについて記述いたします。Aさん・女性77歳 身長155センチ 体重63キロ。3年ほど前から病気により歩行が困難。

自宅は2階建てで、階段の昇降があるため、介助者は必須。普段は、自宅の2階に座って過ごしています。自宅の下はぬかるみが多く地面がでこぼこしています。病院に行く際に車いすを使用する予定で、今回はじめて介助ブレーキ付きの自走用車いすを寄贈されました。背貼り調整のできる車いすであったため、家族に調整の仕方を教えました。事前準備で作製したレッグサポートを使用し、下肢の巻き込みを防止してさらに下肢の接触面積を増やしました。ブレーキのレバーが強力で引かないとブレーキを掛けられなかったため、弱い力でもブレーキが掛けられるように設定しました。

病院にて30台の車いすを寄贈

病院では、先に車いす寄贈のセレモニーを行いその後、車いすの寄贈・シーティングを開始しました。

利用者本人が、何10キロも離れた所から長時間かけて車いすを受け取りに来る事が出来ないためか、その家族が来られるケースが殆どでありました。そのため、家族に使用者の特徴（年齢・性別・身長・体重・疾患・体型など）を聞き、そこから本人に合うと思われる車いすを数台選択し、家族に選んでもらうという形をとりました。その際、事前に作成したタイ語の取扱説明書を配布し、現地コーディネーターと一緒に車いす使用者の家族に説明をしました。

病院には家族で車いすを受け取りに来る人だけでなく、遠くにある病院や障害者施設、村から代表として10数台の車いすをトラック1台で受け取りに来る人もいて、そういう人々のために車いすを梱包し、トラックに積み込む作業も手伝いました。今回、寄贈した車いすの内訳は家庭を訪問して4台、病院にてそれぞれの家庭に寄贈したものが30台、サコンナコン病院に20台、他の遠方の病院に24台、その他村の施設や障害者施設にそれぞれ10数台、合計にして140台の車いすを寄贈することができました。



車いすの寄贈・シーティング



車いす寄贈のセレモニー



トラックで車いすを受け取りに来られる

今回車いすを寄贈したことで感じたこと

タイの車いすは殆どが金属製で、日本製よりも大きいものでした。この車いすに乗り慣れているせいか、多くの方が座幅の広い車いすを求めてきました。日本では、車いすは使用者が座っている状態で座面の両脇に縦にした手のひらが入るくらいが丁度よい大きさとされています。

今回車いすを受け取ったタイの使用者は、私達が丁度よい大きさの車いすを寄贈しても、更に大きい車いすを求めてくる事がありました。家族も本人の要望よりも大きい車いすを希望することがありました。この事から、タイの人々と日本の車いすの捉え方が違うのではないかと感じました。私たちは車いすを使用者の足となるものと捉えているので、操作がしやすく、正しいシートイ



左がタイ製、右が日本製

ングをするために身体にあつたものを選ばなければならぬという考えでしたが、タイの人々は車いすを「ゆつたりと座れる動くいす」として捉えているという感じがしました。今回の活動で心配したのは、この捉え方の違いです。

タイの人々に車いすを寄贈した後、使用者が二次障害で褥瘡（床ずれ）や姿勢悪化を起こさないかが心配です。

現地の高校生・病院のソーシャルワーカーたちの連携

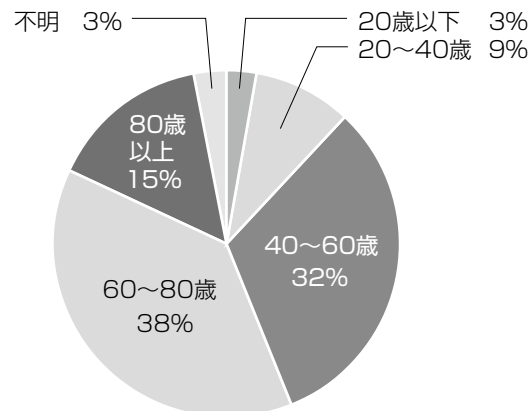
本活動において車いすを130台修理しました。この量は2日間でこなすことができない台数だと判断して、コーディネーターの方々が、現地の工業高校に連絡し、協力をいただきました。日本や韓国の知識、技術を高校生に伝える事で技術の向上を図り、異国の友人ができるきっかけになってほしいと考えました。活動にはサコンナコンの工業高校生6人と先生が1人参加し、みんな熱心に車いすの修理に励んでくれました。

また、病院側のソーシャルワーカーとも連携をとり、お互いに上手く協力しあつて、修理を完了することができました。サコンナコンでの活動は初めてであり、病院の方々はみんな大歓迎でした。

今回の活動を踏まえたうえでアドバイス

●修理のマニュアルを作り修理に統一性をもたせる（全国の高校生向け）

車いすを寄贈した方の年齢層



車いすを修理してくれる工業高校は、車いすの清掃だけしか行わない高校もあるという。そうした高校生に修理のマニュアルがあればいいと思います。

●現地に車いすを送るだけでなく、シートイングまでできるようになる

私達の修理技術を教えるだけではなく、いかにシートイングが大事なのかを知ってもらい、シートイングまでできるようになれば、現地の人にもっとあつた車いすを選ぶことができると思います。

●車いすへの認識を現地の人に改めてもらう

車いすは動かない足ではなく足となること、身体に合わない車いすに長時間座っていることが危険なことを認識してもらいたいと感じました。

●車いすの修理マニュアルを現地の言葉で作る

今回の活動では車いすの乗り方・取り扱い説明書を作成しました。現地の言葉で修理のマニュアルがあれば、修理技術がもっと現地に広まるのではないかと思います。

今後の展開

今後もタイのサコンナコン病院には車いすを送り続けます。病院が管理している車いすを、サコンナコン工業高校生が点検することができれば、我々が現地に赴かずに、届いた車いすを点検することができそうです。

修理や適応など経験を積みデータを集め、今後諸外国で活動する際、どのような車いすを求めているのか、患者の症状の割合など、適合の参考にできるようにしたいと考えております。

従来の活動では、車いすの修理と寄贈のみを目的としていましたが、適合までを目的としたことで今後のプロジェクト活動の目的を大きく変えることができました。私達が実際に車いすの適合を行うことで、利用者の今後の生活に支障をきたすような新たな病気を防止することができ、ただ単に車いす寄贈するよりも、さらに意味のある「寄贈」ができるのではないかと考えました。

今後もデータを収集し、諸外国での活動において、現地が必要とされている車いすの種類や属性を認識することができます。まだまだ、アジアや世界の国々では車いすを必要とする人がたくさん

います。私達が実際に現地へ赴き、直接利用者の車いすを適合することで、その方の生活を少しでもサポートすることができるのではと考えています。

三、感想

新潟医療福祉大学・FWS

今回の活動でも130台程の車いすを届けましたが、まだまだ寄贈が足りてないと感じ、もっと多くの車いすを届けたいと思いました。

サコンナコンよりも遠くの街や村では車いすの数が圧倒的に足りていないことが多く、この地域にでも平等に車いすを届けたいと考えました。言葉が通じない状況ではありましたが、共通の目的を持っているため、どんな時でも心は繋がっていると感じました。ボランティア側の社会勉強にもなり、視野が広がったと思います。

今回は4軒、家庭訪問して直接車いすを渡すことができました。しかし、車いすをもらえないまま亡くなった方もいます。少しでも多くの人に車いすを届けるために家庭訪問先の数を増やしてほしいです。一番うれしかったことは、今回の活動に参加した全ての人が無事だったことです。

KWR1年 羽賀大樹

今回の自分の役割は、タイの高校生に修理技術を教えることでした。今まで海外に行ったことがなく、現地の人と接するのも初めてで、高校生と

意思疎通できるか不安でした。最初は、言いたいことが伝わらないもどかしい気持ちもありましたが、次第に意思疎通が取れるようになりました。これは、高校生が自動車を専門に学んでいたため、車いすの修理技術ではないが、ある程度修理内容を理解していたことが大きいと感じました。1日目はキャスターを中心に修理を一緒に行いました。本当は大車輪から教える流れでしたが、大車輪用のグリスが用意されていなかったためこのようになつてしまいました。これは今後の改善しなければならぬと思います。修理2日目になると、指示しただけで一連の修理が出来るようになって感動しました。言葉の壁があっても修理技術を教えるというか一緒に修理することが出来るようになりました。今回の活動に参加して日本と海外の違いや、人との意思疎通の難しさ、KWRの海外



修理に励むタイの高校生

での活動内容など様々なことが分かり、ますますこの活動に力を入れていきたいと感じました。

来年に伝えたい事として、大車輪のグリスを用意し忘れた経験から、事前にどのようなものが修理に必要なかをよく考え、現地でスムーズに活動が出来るように計画してもらいたいです。

KWR4年 梅原直人

今回の活動場所は、バンコクから北に遠く離れたサコンナコンという町でした。有名な観光地ではなく、静かな町と聞いていました。実際に訪れると、そこは確かに都会のバンコクのような大きな建物や、多くの車やバイクが走っているような街ではなく、田舎という言葉が似合う場所でした。そんな、バンコクとは違う静かな場所で3日間滞在し、活動しました。

活動中心場所は、サコンナコン病院でした。過去に、空飛ぶ車いすプロジェクトとして2回ほど車いすを贈っていた場所でした。この病院に車いすを贈っている大きな理由があります。それは、車いすの管理です。この病院に贈られた車いすは、サコンナコン県内の病院や、隣の県や村の病院に配給されます。サコンナコン県の中でも一番大きな病院であるため、車いす管理の中心地としての役割を持っています。車いすの管理は、サコンナコン病院で働いている、社会福祉ソーシャルワーカーです。

これらの車いすは、サコンナコン県病院の患者さんが、自宅でも使用できるようにしています。

我々は、サコンナコン病院の近くの家や車で30分程に住んでいる患者さんの元へ車いすを届けました。私たちが訪れた4軒は、日本でいう「玄関」というものがありません。これは良い点もあれば悪い点もあります。

まず、悪い点をあげるとすれば、雨の被害が大きくなくなってしまふことだと思います。大雨になると浸水の恐れがあります。実際に訪れた4軒の内2軒は、2階建ての家でしたが、急な階段を登らなければいけませんでした。私たちのような健常者でも、登り降りが大変な階段でした。

良い点は、気軽に外に出られるという点だと考えられます。日本とは違って大きな段差もなく、車いすに乗って外出しやすい環境なのではないかと感じました。更に、比較的余裕のあるスペースがあるため、家内では使用しやすい家もありました。

訪れた方の中には、「車いすがあつたら、毎日お寺に行きたかった」、「家の周りを散歩したかった」という方がいました。車いすがあることで、今までよりも行動範囲が広がります。外に出ることができるようになったりします。それによって、家の中にと居るよりも、気分が良くなり健康的になると思います。患者さんだけでなく、支えている家族も以前の生活より気持ち的に良くなるだろうと、私は思います。

来年の活動に参加する後輩に伝えたいことがあ

ります。来年は、どの国で行われるか分かりませんが、どの国や場所でも共通して出来ることがあるとあります。それは、利用者さんの周りの環境をよく見てほしいことです。出来たら、現地の方に誰でも良いので沢山お話をしてほしいです。

つまり、今までに使ったことが無い、車いすを持つことで、どのように使われるのか、その方自身が車いすをどのように使いたいか。その答えは、その方を見てみただけでは分からないと思うので、勇気を持って聞いてみてほしい。折角の機会だから、日本とは異なる環境で、車いすが如何に重要で大切なものであるか自身でしっかりと感じ取ってほしいです。



日本・韓国チーム、高校生・コーディネーター、病院スタッフみんなで

輸送ボランティアに参加して

野口 香

日本の工業高校生によって修理・再生された車いすを羽田空港からブータンへ「空飛ぶ車いす」として輸送させていただきました。

初めての輸送ボランティア

2015年12月29日、初めての輸送ボランティアでしたが、事前の詳しい説明などにより、ブータン・ハ県の国営病院に無事車いすを届ける事ができました。ありがとうございました。

現地ではピカピカな車いすを目にした先生方から歓声が上がリ、それを見て輸送ボランティアに参加して良かったと思いました。国から支給された車いす2台のうち、1台が故障していたので、良いタイミングだと、とても喜ばれました。

ブータンの病院と医療

病院は国が運営しており医療費は無料です。ブータン国民だけでなく、ブータン在住の外国人や旅行者も無料で診察・治療を受けることができます。とはいえ医者や医療従事者の不足、設備も十分揃っていないわけではありません。特に地方ではその傾向が顕著です。

またブータンには近代医療の病院の他に伝統医療の病院もあります。伝統医療の病院では日本の漢方のような植物由来の薬の処方、薬草サウナ、マッサージなどを受けることができます。



首都ティンブーの伝統治療院

ハ県のハの病院

ハ県は首都ティンブーから車で3時間半のブータン西部の県です。中国と国境を接しているため警備にインド軍が駐在しています。観光開発プロジェクトが進められています。ハの街にはインド軍経営の病院とブータン国営病院があります。今回はブータン国営病院に車いすを寄贈しました。

ここでは内科・小児科、歯科、眼科、耳鼻咽喉科の先生が各1名ずつと伝統医療の先生(医院長)、助手の先生の計6名と看護師などの医療スタッフが在籍していますが、医者も医療設備も足りなくて困っているとのことでした。



車いすを運ぶドライバーとガイド

近々この病院の建て替えが計画されており、医療サービスと施設の充実が期待されています。やる気に満ちた若い先生達なので、新しい病院でもさらに活躍してくれることだと思います。

またブータンに訪れる機会があったら他の病院にも車いすをお届けしたいです。



ハの病院入口 救急車も寄贈されたもの



スタッフ全員と車いすを囲んで

チェンマイからの手紙

タイのヘルピングハンドチェンマイ財団に寄贈された「空飛ぶ車いす」が、チェンマイ市内の男性のもとに届けられました。その車いす贈呈式の様子をお伝えします。



日本社会福祉弘済会 様

拝啓、時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。昨年度は当財団へ車いすを寄付いただき大変ありがとうございました。尚、私は日本語ができませんので、財団の谷口美紀が代筆しております。ご了承ください。

谷口から電子メールでご連絡させていただいた通り 1 月 16 日（土）に贈呈式を行いました。寄付をいただきましてから、こちら側の処理に時間がかかりましたこと、お詫び申し上げます。貧困や障害で苦しむ人々への寄付に対して、市の福祉課への問い合わせおよび当財団独自の再調査に時間を要しました。

今回、チェンマイ市内に在住のター・ジンバリリンさんという方へ御財団からの車いすを寄付しました。ターさんは妻に先立たれて一人暮らし、屋根しかない家に住んでおりましたが、高血圧から脳梗塞を患い下半身および片手が不自由な暮らしをしています。贈呈式は、市の福祉課の職員と看護婦の立ち合いのもと行われました。写真を添付いたしますので、ご覧ください。

また、贈呈式が終了後に財団の関係者に日本社会福祉弘済会の空飛ぶ車いすプロジェクトについて説明をし、今後、チェンマイ日本人会やチェンマイ市内の日本人の関係する団体にボランティアの支援を要請するよう呼びかけ、活動の輪を広げたいと説明しました。引き続き、ご支援を宜しくお願いいたします。 敬具



ヘルピングハンドチェンマイ財団

理事長サクダ・シルプラシット（谷口 代筆）

มูลนิธิ เหยิงใหม่คนละไม้คนละมือ

www.HelpingHandsChiangmai.org | facebook.com/HelpingHandsChiangmai


Tel. 081 387 3569 Fax. 053 327 056 | contact@HelpingHandsChiangmai.org

18/1 Wiangkaew Rd., T.Sriphum, A.Muang, Chiang Mai 50200

いつでも、誰でも「はがき1枚」から参加できる ボランティア活動。

—「書き損じはがき」の収集にご協力をお願いします—

**「空飛ぶ車いす」は、日本で使われなくなった車いすを
日本の工業高校生が修理・再生して
アジアに贈るボランティア活動です。**



「空飛ぶ車いす」は、
多くのボランティアに支えられています。

はがき収集 ボランティア

全国の「はがき収集ボランティア」から届けられた「書き損じはがき」を切手に交換し、さらに企業等の協力により切手を現金化して“バンクしないタイヤの購入費用”や“工業高校から国際空港までの車いす輸送費用”に充てています。

修理 ボランティア

工業高校のクラブ活動や有志、生徒会などで車いすの修理を行います。

輸送 ボランティア

ビジネスや観光などでアジア各国を訪問する際に、搭乗機手荷物として運びます。

ご寄付をいただいた皆さま

(平成26年10月～平成27年12月)

数ある団体の中から当会の趣旨に賛同いただきご寄付を賜りました皆さまに
感謝申し上げます。温かいご支援ありがとうございました。

(敬称略・順不同)

NPO法人ワーカーズ・コレクティブたすけあい せや
明石 富美子
阿部 佳代子
阿見町社会福祉協議会
荒井 文子
荒川区役所地域文化スポーツ部生涯学習課
糸魚川市社会福祉協議会
伊藤 満男
岩手県国際交流協会
岩手県社会福祉協議会
大星社
岡本 孝二
奥出雲町社会福祉協議会

神奈川県社会福祉協議会
神栖市社会福祉協議会 波崎支所
川角 昌一
協栄年金ホーム
気仙沼市社会福祉協議会
椎葉村社会福祉協議会
紫雲会 千葉南病院
ジブラルタ生命保険株式会社
竹谷 尚人
田辺 幸子
鶴岡 保輝
特別養護老人ホーム 永福園
栃木市社会福祉協議会 岩舟支所

豊明市社会福祉協議会 ボランティアセンター
南関町社会福祉協議会
新美 涼子
八丈町社会福祉協議会
兵庫県立相生産業高等学校
芳香会病院青嵐荘療育園
松田 陽子
三島 成久
三菱総研DCS株式会社
山形市役所社会教育青少年課
与那覇 絹子
霊山会 玉光苑
渡辺 幸子

お問い合わせ
はがき送付先

公益財団法人
日本社会福祉弘済会

〒130-0022 東京都墨田区江東橋4-24-3
URL ▶ <http://www.nissahasai.jp/soratobu/index.html>
TEL.03-3846-2172 FAX.03-3846-2185

神戸市立科学技術高校の 空飛ぶ車いす活動

神戸市立科学技術高校 空飛ぶ車いす研究会

顧問 渡辺 輝真

そんなとき、「工業高校の特色」を生かしたボランティアはないだろうかという声があがりました。当時、仮設住宅で「庇がない」、「靴を脱ぐ台がほしい」、「スロープをつくってほしい」などの要望もあり、工業高校の技術をもってすれば、できない内容でした。

1 この活動にめぐり合うまで

(1) 阪神淡路大震災と高校生ボランティア

1995年1月の阪神淡路大震災のあと、各校でもボランティア活動が積極的に行われました。本校でも、避難所へ出た衣服の洗濯、全国からの支援物資の仕分け作業などに多くの生徒が参加しました。

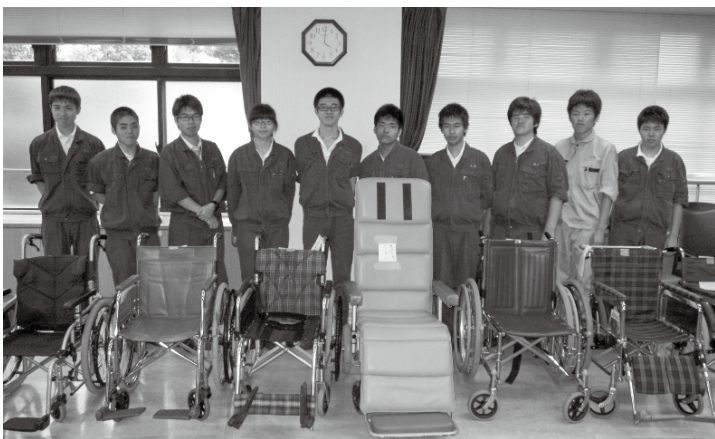
「工業高校で学んだ技術を生かしてボランティアができないだろうか」そんな思いを実現させてくれたのが「空飛ぶ車いす」です。東南アジアはじめ多くの国々で車いすを待っている人々に、技術を通して「安全と快適の提供」を目指す本校の取り組みについて紹介させて頂きます。

(2) 工業ボランティアの壁

しかし、学校近隣の仮設だけでも千戸以上あり多額の費用が必要となり、まず材料費等の捻出という大きな壁がありました。

日本では年間5万台以上の車いすが廃棄されています。まだ使えるのに「もったいない」と、全国28都道府県の工業高校生が、車いすの再生に取り組んでいます。「空飛ぶ車いす」は、工業高校生が古い車いすを分解、整備、再生し、アジアで車いすを必要とする人たちにプレゼントする活動です。これまでに27カ国の7500人以上の子供や高齢者に車いすをプレゼントしました。

今回は、クラブ活動として日々活動を行い、数多くの実績を残されている神戸市立科学技術高校の「空飛ぶ車いす研究会」について顧問の渡辺先生に教えていただきました。



2015年8月 神戸市内の特養ホームでの訪問点検

そして、工業高校のモノづくりで福祉機器を製作してはどうかという案もありました。しかし、小さな品物ひとつでも、その材質、重さ、表面処理強度、使用条件など安全性・信頼性を十分検討しておかねばならず、それより市販で安くて良い物があり、敢えて工業高校が取り組むものではないという結論に至りました。

さらに、地域で補修作業などを無料出張修理すれば、生徒もやり甲斐を感じ、喜んでくれる人の顔を見ることが出来ます。しかし、その一方で、地域でそれを生業とする人がいることを考えると、ボランティアだからと一生懸命頑張ることが果たして良いものか迷わざるを得ませんでした。

このように、工業高校の特色を生かしたボランティア活動は①費用の捻出②安全性・信頼性の確保③地域との協調という3つの点で行き詰まり、なかなか方向性を見出せないまま時間が経ちました。

(3) 「空飛ぶ車いす」とのめぐり合い

それ以後、頭の片隅に「工業高校の特色を生かしたボランティア活動は何か？」の思いがずっと残りました。

8年が過ぎたある日、ふと新聞記事に目がとまりました。2003年11月「朝日のびのび教育賞」の紹介で、受賞が全国で6校あり、その一つが「栃木工業高校 国際ボランティアネットワーク」ー中古車いすを世界に贈るーでした。使い古された車いすを修理して東南アジアへ贈る活動で1990年頃からの取り組みとありました。

見た瞬間、「これだ！」「3つの壁は解決できる！」と、まさに目から鱗が落ちる思いでした。そして

めぐり合えたのが「空飛ぶ車いす」でした。早速、先駆校で大きな実績を残している栃木工業高校を2004年3月に訪問、作業内容や活動運営について親切的な指導をいただき、その年の新学期から活動を開始しました。

2 修理技能の向上をめざして

私たち修理ボランティアの使命は、傷んだ車いすを元の機能に還元し、安全と快適を確保することです。車いすを必要とする途上国の多くは工具や部品のない地域です。少しでも長く使用して頂くために、修理の不完全やミスは許されません。そのことを常に意識しながら作業を進めています。そのためにも生徒の修理技能の向上が重要になります。

(1) 技能向上のため特養訪問点検

長年、夏休みの取り組みとして特養ホームでの訪問点検をしています。ここでは限られた時間と工具で、さまざまな故障や調整をどれほど早く正確に作業できるかという課題が与えられます。特養ホームに13時に到着して17時の作業終了時間まで、次々と持ってこられる故障車いすを、機能面では問題の無い状態に修理します。

昨夏、ある施設では47台の車いすを10人が4時間半で整備しました。その間休憩はありません。日頃は1台を5〜10時間かけて整備しているのに、非常にハードな作業でした。しかし、全力を出した生徒は、疲労の中にも少し遅くなったように見えませんでした。

(2) 東日本大震災・被災車いすの修理

少し以前の話ですが、東日本大震災から4カ月

が過ぎた2011年7月、神奈川工科大学の学生が車いすを届けるために宮城県の女川町立病院を訪れました。そこで彼らが見た物は、病院裏に集められた泥のついた車いすの数々でした。「高台の1階まで津波が押し寄せ、この車いすは海水と泥に浸かったので廃棄するしかない」との病院関係者の話でした。学生たちは、空飛ぶ車いす活動校な



変形した部品(上)と自作した部品(下)



2011年8月 被災車いすの変形・破壊箇所を調べる生徒



フライス盤を使って部品を作製する生徒

ら何とか再生できないかと考え、日本社会福祉弘済会を通じて全国の活動校に呼びかけました。すぐ本校も手を挙げ、翌週には女川町立病院から3台の被災車いすが本校に届きました。それはこれまで見たこともない無残な姿でした。まず、潮水と泥を洗い落とし、変形・破壊箇所を突き止めるため、ボルト1本に至るまで完全に分解しました。このときどうしても、折り畳みができない1台があり調べたところ、直径8ミリのボルトが曲がり、プラスチックワッシャが潰れたことが原因でした。計算してみると、このボルトが曲がるには約1トンの力が車いすにかかっていたことになりました。このとき、津波の破壊力の大きさを改めて実感しました。約1カ月かけてほぼ元通りに修理した車いすは、日本社会福祉弘済会の手配で町立女川病院に送り返されました。受け取った病院の担当者からの電話は、「本当にあの車いす？ 見違えるほどピカピカになっています！」と、とても明るい声でした（当時の日本社会福祉弘済会佐々木様より）。



修理後の車いす



女川病院から届いた車いす

3 空飛ぶ車いす活動生徒の感想

本校では、放課後の部活動である「空飛ぶ車いす研究会」と、機械工学科3年生の授業「課題研究」でこの活動に取り組んでいます。2016年で12年目を迎え、これまでに送り出した車いすは合計1686台になりました。以下、活動した生徒の感想です。

・サビ取りや汚れ磨きの作業は大変でしたが、車いすがなくて困っている人のことを考えると、しんどく感じることはなかった。

・はじめ、車いす修理は簡単だろうと思っていたが、とても細かいところまで整備するので大変だった。でも、バングレイディッシュやスリランカなどの遠い国から笑顔で車いすに乗っている写真が届くと嬉しかった。

・1台を修理した達成感で次の1台に取り組んでいきたい。そして、車いすを提供してくれた人たちにも感謝したい。

・自分の小さな行いが、見えない所で誰かのためになっているということを実感できた。将来、福祉関係の仕事をしたと思う。

・私はものづくりや修理が好きで、この活動に参加しました。外国で長く使ってもらうためには様々な整備をしなければなりません。この活動ができることが嬉しいです。

・日本で廃棄されている車いすは、まだまだ使えるものがたくさんあることに驚きました。外国には車いすが必要でも、買うことができない障害者が多勢います。小さな活動ですが、大きなボランティアだと思いました。

4 活動の教育的可能性と課題

教育という立場からこの活動を見た場合、様々な目的、効果を含んでいます。それを少し述べておきます。

(1) 工業人の育成

工業高校生が学んでいる技能・技術を生かして、教材ではなく実際に使用する車いすの修理を行う。技能訓練のためではなく、常に遠い国で使う人のことを思い描いて、細かいチェックとていねいな

作業を心がけていく。これは工業高校生にとって、「ものづくり」の原点に通じ、工業人の育成に大切な意味をもつ体験にもなります。

(2) 問題解決能力を高める

これまで1700台以上の車いすが本校に提供



2015年11月 日社済が、表敬訪問時の皆さんの様子

されましたが、その種類は多種多様です。自走式、介護式、大人用、子供用、障害の程度による機能の種類など細かく分かれ、その程度も真つ赤に錆びたものから、新品同様のものまであります。作業内容もネジの緩みからフレーム折損の溶接まで、それぞれ対処が異なります。そこには、1台1台の状態に応じた解決が必要であり、「課題研究」授業の目標の一つ「問題解決学習」とも合致しています。

(3) 諸外国の実情を知る

知らなかった国々に車いすが届き、現地から車いすを使用している写真や礼状が届くと、生徒達はこれまであまり興味のなかった国に関心を持ちます。なぜ、日本ではあり余る車いすが現地ではそれほど貴重なのか、その背景にある国政や経済状況などを教科書とは違った切り口でとらえ、諸外国の実情を知る機会にもなります。

(4) 循環型社会へ意識を転換

物が豊富でまだ使えるものが大量に廃棄されている日本では、リユースやリサイクルについて理解する機会はありません。本校に送られてきた車いすを見た生徒は「ここに送られなかったら廃棄されたのか。」と呟きます。整備すれば、まだまだ使える車いすの再生・活用を通して、これまでの大量生産・大量消費社会から、物を大切に使い、資源を再利用・活用していく循環型社会へ、グローバルリユースを実感します。

5 おわりに

古い車いすを磨いて、修理する。ただそれだけの作業にすぎない活動が、技術以外に教えられる

こと、心に響くことがたくさんありました。私たちは、この活動にめぐり会えたことを喜び、心から感謝しています。最後になりましたが、「空飛ぶ車いす」という活動の場を与えてくださいました日本社会福祉弘済会、そして交換部品の購入資金などを助成いただいている国際ソロプチミスト神戸、JAWKインターナショナルの皆様方に厚く御礼申し上げます。



寄贈される車いすに貼付されるシール
きちんと整備され、担当者名も記載される



寄贈された車いすの台数(部室内掲示)

2016年度 社会福祉助成交付団体

法人	事業名
セルフサポートセンター浦河	第13回当時者研究全国交流集会 大阪大会(仮称)
コミュニティシンクタンクあうるす	第3回ソーシャルファームサミット in つくば ~就労困窮者の支援の仕組みをデザインするフォーラム~
伊達市介護者と共にあゆむ会	伊達市介護者と共にあゆむ会設立20周年記念講演会
権利擁護あおい森ねっと	地域を支える福祉・医療・法律・教育をつなぐ研修会
仙台市市民文化事業団	バリアフリーボランティアステップアップ研修会
仙台ダルク・グループ	第20回仙台ダルク記念フォーラム
障害者社会参加劇団 劇団ファットブルーム	リハビリが出来る街づくり ~健康医療福祉都市構想
たすけあいの会ふれあいネットまつど	"住民主体の新生活支援サービスを学ぶ"ケアマネージャー研修会
スマイルクラブ	発達障がい児の運動指導に携わるボランティアの養成事業
NECST	発達障害者の就労と就労支援を考える
東京都身体障害者団体連合会	東京都身体障害者相談員研修会
WEL'S新木場	就労系事業所の連携によるセミナーの実施
東京都中途失聴・難聴者協会	シンポジウム「中途失聴・難聴への理解を求めて」
次世代サポート	小中学生と乳幼児を結ぶファシリテーター養成研修事業 ~地域子育て支援の連携を目指して~
東大和市レクリエーション協会	認知症予防とレクリエーション活動の研修講座
みなとチャイルドライン・子ども電話	受け手養成講座と継続研修
逗子市社会福祉協議会	福祉教育(福祉教育セミナー・こころプロジェクト実践)
よこはま地域福祉研究センター	インクルーシブ社会の創造実現する 障害者福祉現場職員のためのエンパワメント研修
神奈川工科大学車いす修理屋(KWR)	車いす修理&メンテナンス技術講習会
新潟医療福祉大学(FWS)	空飛ぶ車いす活動
ゆめこころ	障がいを持つ青年の問題行動の理解とその対処
ともそだちプラネット	発達特性のある子どもたちの指導法・援助法の実践セミナー研修 ~ともに育ちあい、ともに生きる地域社会をつくる~
シルバーカフェ	公的施設を活用した心の健康、体の健康づくり教室の開催(カフェフォーラム)
岐阜羽島ボランティア協会	青少年更生保護ネットワーク研修会「居場所と出番を」~職親チャレンジプロジェクト岐阜~
明光会	障害者生活支援シンポジウム「障害者差別解消法の施行で地域はどう変わったか」~ある地域のフィールドワーク報告を中心に~
トコトコ保育広場	トコトコ保育広場保育発信
京都難病支援パッションネ	難治性疾患啓発 ~かわいキャラクターが分かり易く難病を解説する楽しい講演会~
トゥギャザー	施設で働く障がい者の賃金アップを目指す事業づくり
発達凸凹サポーターてくてく	発達障がいに関する学習会及びソーシャルスキル教室
南大阪自立支援センター	生まれた地域で幸せに働く応援事業「ぶれワーキング」勉強会
介護保険市民オンブズマン機構大阪	自信をもって仕事をするために ~経験2~3年目の人のための介護職員研修~
歌体操介護予防市民塾	高齢者介護施設においてボランティア活動するための歌体操研修講座
播磨認知症サポート	西播磨認知症ケア実践研修
宝塚 高次脳機能障害者 共生の会	高次脳機能講演会 高次脳機能障害の理解から支援へ
あわホームホスピス研究会	講演会・シンポジウム「暮らしの中で近く ~病気でも高齢でも豊かに生きるために~」
高知県聴覚障害者協会	平成28年度四国手話講座担当講師研修会
城南健康ふれあい倶楽部	認知症サポーター活動促進研修と認知症カフェの支援者育成研修
フリースペースふきのとう	長崎県のつどいー共感しよう仲間、広がろう思い、つながろう地域ー(登校拒否・不登校・ひきこもり)
フリースクール クレインハーバー	「子どもの多様な学びを知ろう!」キャラバン IN 長崎県
ほほえみながさき	福祉有償運送認定講習インストラクター養成講座派遣事業
Ryouiku Circle はなはな	近代ボバース概念小児領域8週間講習
東北福祉会	地域住民が主体となり企画・運営する認知症カフェの効果的な実施方法の検討
日本チャリティ協会	パラアート国際交流活動事業
アドベンチスト福祉会	都市部団地の高齢者等に対する新たな権利擁護ニーズと方策に関する研究
障害のある人と援助者でつくる日本グループホーム学会	重い障害や行動障害のある方の地域生活について考える研究委員会
静岡FIDサッカー連盟	日本・韓国・台湾スポーツ交流のための基盤作り
レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク	当事者参画型ひきこもり支援者養成研修プログラム開発事業
東京コロニー	重度身体障害者のテレワーク(在宅就労)普及に向けた課題等の調査研究~就労支援事業所の事例から

助成対象事業／助成内容

	対象事業	対象経費	助成額
研修事業	集合研修	福祉サービスのあり方や専門的知識、技能の習得などをテーマとして開催される集合研修事業(研修会、セミナー、講演会など)	講師謝金・交通費・宿泊費・会場費・報告書作成費
	派遣研修	福祉施設職員などが幅広い視野と専門性を持って支援業務に携わるために、他の福祉施設、団体などで一定期間実習する派遣研修事業	
研究事業	実践研究	各福祉分野の先駆性ある事業の実践を通して行われる成果、課題のまとめなどの実践研究事業	事業費・調査経費・報告書作成費
	調査研究	社会福祉関係者の専門性の向上、現任訓練の方法や体系、また就労、福利厚生などをテーマとする調査研究事業	

ボランティア・スピリット賞^{アワード}

日社済の支援事業である「空飛ぶ車いす」の活動として本誌18～21ページに掲載されている「神戸市立科学技術高等学校のクラブ活動」の取り組みにより、同校は第19回ボランティア・スピリット賞^{アワード}において関西ブロック・コミュニティ賞を受賞しました。今回は同校が受賞したボランティア・スピリット賞^{アワード}について紹介します。



表彰を受ける神戸市立科学技術高等学校のみなさん



PRUDENTIAL SPIRIT OF COMMUNITY ボランティア・スピリット賞^{アワード}とは

世界最大級の金融サービス機関プルデンシャル・ファイナンシャルが地域でボランティア活動に取り組む中学生・高校生を応援する国際的なプログラムで、日本、アメリカ、韓国、台湾、インド、アイルランド、中国、ブラジルで開催されています。ボランティア活動に対して

「ありがとう」という感謝の気持ちを贈

り、称えるとともに、仲間との交流の機会を設けたり、情報発信をしています。このプログラムは学校・各種団体へのご案内、表彰式の運営など、すべて社員のボランティアにより実施しています。

アワードの3本の柱

「表彰」「仲間との交流」「情報の発信」という3本柱で、皆さんのボランティア・スピリットを応援していきます。



応募要領は毎年5月頃告知されます。

PRUDENTIAL SPIRIT OF COMMUNITY ボランティア・スピリット賞^{アワード}の詳細はホームページをご覧ください。

www.vspirit.jp

ボランティア・スピリット賞

検索



福祉の共済を推進しているジブラルタ生命は、地域に根差した企業であり続けるために、全国各地で社員による福祉施設でのボランティア活動や、地域でボランティア活動に励む

青少年を応援するボランティア・スピリット賞^{アワード}をはじめとしたさまざまなプログラムを実施し、福祉や教育分野での社会貢献活動に積極的に取り組んでいます。

ジブラルタ生命は、プルデンシャル・ファイナンシャルの一員です。

■ お問い合わせ先：ボランティア・スピリット賞事務局
〒100-0014 東京都千代田区永田町2-13-10 プルデンシャルタワー 電話 03-5501-5364



Gibraltar
ジブラルタ生命

「公益財団法人 日本社会福祉弘済会」はジブラルタ生命と提携し「福祉の共済」を推進しています。



くっきり! 福祉の未来形

ニッ シャ サイ 日社済の 主な事業



社会福祉助成事業

公募による社会福祉関係者の研修・研究事業等への助成を行っています。



アジア福祉助成事業

全国社会福祉協議会と連携した福祉の国際協力パートナーの養成と、その活動の支援・助成を行っています。



空飛ぶ車いす支援事業

アジア等の障害をもつ方々への車いす修繕・寄贈を支援しています。



社会福祉関係者の共済に関わる事業

福祉関係者の福利向上のために提携会社を通じて団体扱生命保険を提供しています。



公益財団法人 日本社会福祉弘済会

〒130-0022 東京都墨田区江東橋4-24-3 TEL.03-3846-2172 <http://www.nisshasai.jp/>